

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	里地里山の特性評価の実施とこれに応じた保全活用の実施
手法名	フクロウの森づくりネットワーク
主体	グランドワーク西鬼怒
背景(地域の課題)	里地里山の荒廃は、人間にとって有益な生き物の生息環境の悪化も意味している。生態系のつながりに配慮しながら、要となる動植物の保護のあり方を検討していくという視点が必要である。
手法／方策の詳細	<p>1)フクロウの生息域の特徴と人間にとっての有益性 フクロウは、人里の近くの古くて大きな木の樹洞(じゅどう)に営巣する。林縁部に生息し、林の中段を飛翔しながら、農作物に被害をもたらすネズミやモグラなどの小動物を餌としている。またイノシシなどの獣が人里に出没するのを防ぐ緩衝帯を形成する役割がある。</p> <p>2)巣箱の設置と保全 近年、人里近くの古木が減少したことでフクロウの営巣場所が不足している現状がある。そこでフクロウが営巣するための巣箱を設置した。現在、全国に保護活動を広げようと105の巣箱を設置し、年間30羽前後が育っている。また、飛翔行動を阻害しないように森を手入れすることも大切である。</p> <p>3)フクロウを契機にした地域おこし フクロウは害虫や雑草を捕食することから、宇都宮市逆面町では、餌場を確保するため化学肥料や農薬を半分以下に抑えた米作りを始めている。「フクロウ米」と呼ばれるこの取り組みは、現在町内の水田の9割に広がっており、農業はもちろんのこと観光や工芸品など様々な分野に波及した地域活性化が期待されている(写真)。</p>
手法・技術的視点	<p>里地里山における生き物の生息特性は、当該生物の保護活動の指針になるだけでなく、農業など地域に根差した産業再生の糸口ともなりうる。</p> <p>農業振興や地域づくり等において益鳥として位置づけられた本事例のフクロウの保護活動をモデルにして、その他の様々な有益動植物の保護と一体となった里地里山保全活用の方策を模索することが可能である。</p>
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>育む里の フクロウ米</p> <p>商標登録済のロゴマーク</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>各戸に飾られているフクロウのオブジェ</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">写真 フクロウをシンボルにした地域づくり活動の展開</p>	
参考資料	里なびin静岡 グランドワーク西鬼怒 長縄充之